環境学の授業拝見!

理学、工学、人文科学、異なる専門領域の学生が
ともに学ぶ環境学研究科ならではの授業です。

▲▼藤前干潟で

▼フィールド調査後のディスカッション

【今回の授業】

環境学フィールドセミナー

環境学研究科の3専攻の教員と学生が、専門の枠を超えて同じフィールドに出かけ、議論します。何より大切にしているのは「現場に行き、自分の目で何が起こっているのかを確かめる」という精神。エネルギー・環境関連の施設見学、名古屋都心のまち歩き、濃尾平野西部の藤前干潟や長良川河口堰など、訪れるフィールドも、地球環境科学、都市環境学、社会環境学、各専攻の特色を生かしています。

事前学習では、各フィールドについて調査項目が設定され、学生はいずれかのフィールドを選んで調査し、発表します。そこで得た各フィールドの情報や知識は、実際に現地に行って、見て、聞いて、感じて、どう変わっていくのか――そのプロセスを、専門が異なる学生同士が共有し合うのがこの授業の面白さです。「百聞は一見にしかず。現場を見る意味はすごく大きい。事前調査で自分が思っていたこととまったく違う見方も出てきて、フィールドを見た後の議論は、かなり具体的になります」と言うのは、担当教員の一人、山口靖先生（地球環境科学専攻）。

人間、都市、自然。そのかかわりの中で生じる環境問題や災害、社会問題について、現場から考える大切さを学んでいます。

▲名古屋都心のまちあるき

川本 恭平さん
都市環境学専攻
前期課程1年

専門を超え、一市民として社会的課題と向き合う

フィールドセミナーを通して最も印象に残ったことは、自分がいかに自分の住む名古屋・愛知の環境について無知であるかということだ。私は卒業後、この授業で学んだ専門知識とはほとんど無縁の職業に就くだろうが、それでもより良い社会・生活をつくるために、普段の生活の中で環境と向き合っていかざるをえないだろう。その時、一市民として様々な社会的課題に対して関心を示し、意思表示をする。その時のための授業なのだと思う。

現実を知ることが大切

下調べでは独力で調査し自前の理論を立てる。事前討論会では自分と他人の意見を比較する。現地視察では問題の中に身を置いて「当事者」となる。最後に、事後レポートではこれら様々な視点に立った経験を生かして総合的に考察する。環境問題は立場によって意見に違いがあり、その解決は一筋縄ではいかない。この授業では様々な立場を理解し、問題を俯瞰する能力を養うことができる。全人類の共通課題である環境問題に適切なアプローチを図ることができると思う。

松田 芳和さん
社会環境学専攻
前期課程1年